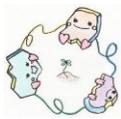


東北復興 PSW にゆうす

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大に伴い、お亡くなりになられた皆さまに哀悼の意を捧げますとともに、罹患された方々に心よりお見舞い申し上げます。そして、各地で治療、感染予防、感染対策に携わる皆さま、様々な自粛要請に協力していらっしゃる皆さまに感謝を申し上げます。感染不安を抱えながらの生活は長期化が予想されております。皆さまも、無理をせずどうかご自愛ください。

(東日本大震災復興支援委員会一同)

「いまできること」「時熟」



長谷 諭 (宮城県支部)
東日本大震災復興支援委員会 担当理事
宮城県立精神医療センター



東日本大震災から来年の3月で10年が経過します。私は発災直後に設置された東日本大震災災害対策本部(設置期間:2011年3月12日~2012年3月31日)の末席に加わり、その後、東日本大震災復興支援本部(設置期間:2012年4月1日~2014年6月20日)、現在の東日本大震災復興支援委員会(設置期間:2014年6月21日~)と少しずつ形を変えつつ継承される「復興支援」への取り組みにほんの僅かでも出来ることがあればとの思いにて、これまでかわりを継続させていただいております。この間、何ができたかと問われると確固たる自信をもって答えられるものは少なく、今もなお、悩みながら活動を続けているというのが率直な感想です。当初は目まぐるしく変わる状況と不確実さをもった情報の中から正確な情報収集に努めることとそれらに対する方策の検討、結果として募金の実施や現地への支援者継続派遣、現地の想いや声を聴く「ほっとミーティング」などが行われました。そして現地からの情報発信や全国の仲間との相互交流を目的とした「東北復興 PSW にゆうす」の発刊、全国大会における物販、復興支“縁”ツアーの実施と、活動内容も少しずつ変わってきました。

私が勤務する医療機関のある宮城県名取市は去る3月30日、ハード面の整備がほぼ完了したとして「復興達成宣言」を行いました。一方で市は引き続き被災者の心理的なケアなどソフト面の復興に取り組むとしております。そして復興達成宣言後の5月30日に東日本大震災の記憶及び教訓を世界各地そして後世に伝承し、震災を風化させることなく防災意識を醸成していくことを目的とし、「名取市震災復興伝承館」が開館しました。同館の最大の特徴は伝承施設としての役割に加え、防災拠点としての機能を持たせたことにあり、語り部のほかに防災教育などを行うことで地域住民と共に、自然災害に強い社会実現の一助になることを目指し、災害に強いまちづくりを担う人材の育成を支援することとしております。

今から約半年前の2020年1月17日、阪神・淡路大震災から25年が経過したその日、各地での追悼行事の報道を目にしました。当時の記憶や犠牲になられた方々への想いを涙ながらに語られる方、生きていることや人とのつながりへの感謝を述べる方など、その内容は様々でしたが、その全てが震災がもたらした影響の大きさを如実に語っておりました。

10年、25年など年月をひとつの区切りのように表現されている場面に触れることもありますが、これまで上記協会活動に関わらせていただき、また、被災地の精神科医療の場に勤務する者として日ごろから震災の影響を受けながら生活している方々と関わり、そして阪神・淡路大震災を経験された方々の言葉を聞くにつれ、過ぎた年月のとらえ方は人それぞれであることを改めて痛感しております。

2020年6月21日に開催された(公社)日本精神保健福祉士協会の第8回定時総会にて役員が改選され、新体制に移行いたしました。本委員会はこれまでの活動を継承しつつ、私たちができる復興支援の有り様を検証・検討していく予定です。復興への長い道のりの困難に寄り添って関わり続けることができるよう、そのために悩み続けていくことがいまできることの一つなのだと思っております。



名取市震災復興伝承館ホームページより

東日本大震災・被災地障害者作業所等製品販売事業の「これまで」と「これから」

小淵 恵造（群馬県支部）／東日本大震災復興支援委員会委員

当委員会では、活動の1つとして全国大会の開催に合わせて「東日本大震災・被災地障害者作業所等製品販売事業」を行っています。

本事業の始まりは、委員会の前身である東日本大震災復興支援本部の頃に遡ります。当時、みやぎ心のケアセンターにお勤めされていた構成員の鶴幸一郎氏の呼びかけで被災地事業所の製品を集め、全国各地の構成員から販売協力の有志を募り、2013年6月に石川県金沢市で開催された全国大会の会場で被災地事業所の製品を販売したのが始まりでした。以来、埼玉、福島、山口、大阪、長崎、愛知と毎年開催される全国大会の会場で販売ブースを設け、被災地事業所で作られた製品の販売を続けてきました。当初は、有志によるボランティアとして始まりましたが、当委員会が協会内での常設の委員会に位置づけられてからは継続的な事業として毎年少しずつ規模を拡大しながら活動を続けています。

製品を提供していただく事業所の方からは「全国の方に被災地の現状を知っていただく機会になり、売り上げにもつながるのでありがたい」とのお声をいただき、販売ブースに足を運んでくださる構成員の方々の中には「去年も買いました」といって、リピーターとして毎年の製品販売を楽しみにして下さる方も多く、事業を企画・運営する委員としては大変なやりがいを感じています。

しかしながら、本事業について好意的なご意見をいただく一方で、被災地事業所の方からは「東日本大震災以降も全国各地で地震や台風等の災害が頻発する中で自分達だけが製品販売の機会を得てよいのか？」との疑問の声も聞かれ、間もなく発災から10年を迎えようとしている中で「東日本大震災」と「復興支援」という2つのキーワードを冠した委員会が「いつまで」、「どのような」活動を続けていくべきか、模索を続けています。

東日本大震災の教訓をコロナ禍に活かす

菅野 直樹（福島県支部）／東日本大震災復興支援委員会委員長

新型コロナウイルスは世界中に感染が拡大し、我が国では緊急事態宣言は解除されたものの新規感染者は日々確認され、第2波も懸念されています。この間、クライアント一人ひとりの生活に寄り添い、支援を続けてこられた皆さまに心から敬意を表します。

さて、このコロナ禍に於いて当委員会では、平時の機能を維持すること、そして、当時から得られた教訓を共有することが果たすべき役割と考えています。それを踏まえ、ひとつの経験則ですが、この紙面を借りて試みたいと思います。

当時の被災地の状況を顧みますと「支援者の立ち位置」が複数存在していました。それは例えば、①支援競争（誰が、どの団体が最も支援しているか）、②共感競争（だれが一番、被災者のことを分かっているか、ひどい状況を見てきたか、話を聞いたか）、③能力競争（経験者と新参者）、④方針争い（現地スタッフと組織本部とのズレ）、などが挙げられます。

上記した4点は今般の状況に於いても起き得ること、むしろ起きていることではないでしょうか。ソーシャルワーカーとしての想いや信念が故に摩擦を生じることもしばしばあるかもしれません（自戒を込めて）。被災時には『被災者であり支援者』と称されますが、今回の事象は、当事者性を持った支援者、という視点で同じような心境に至ります。支援者の立ち位置が複数あること、非日常における支援者はその立ち位置を取る可能性があること（陥ることがあること）を皆さまと共有させていただければ幸いに存じます。

6月19日（今日現在）、都道府県の移動も解除されましたが、疲れが出やすい時期です。皆さまにおかれましてはくれぐれもご自愛くださいますようお願い申し上げます。

★☆構成員からお寄せいただきましたメッセージをご紹介します☆★

第46号を読み、伊藤亜希子さんの言葉が私のなかに響くものがあり、なにか言葉を伝えたいと思い、感想を送らせてもらいました。心を打たれたのは、人々の記憶の風化と、実際にまだまだサポートが必要な状況があることのギャップの部分です。時間が経つことで緩やかになるものもありますが、時間が経ったからこそ出てくるものがあることに共感しました。私の体験になりますが、私は子供の頃に母を亡くし、そのときはあまり悲しい気持ちもなく、周囲の大人からも助けをもらいながら生活を送ることができていました。しかし、時間の経過とともに助けてくれた人たちは離れていき、それと反比例するように、成長していくなかでさまざまな苦しみや、生き心地の悪さがありました。大人になった今でも時折揺らぐことはありますが、今ではそれはグリーフの影響であり、その反応やプロセスはひとりひとり異なることや、同じような体験をした人や場との出会いを経て、グリーフを抱えやすく生きられるようになりました。そういった経験から、サポートがその時々で変化しながらも持続的に必要であることを切に感じています。今、人々の関心が薄らいだ状況のなかで発信し続けていくことはエネルギーを要することだと思います。ただそのようななかでも皆さまが活動をつないで続けてこられたこと、それは大きな希望だと感じました。その素晴らしい取り組みへのねぎらいと、必要なサポートが必要な人に届くようにと願い、また私自身も今だからこそできること、これからのためにできることを考えていきたいと思いました。

本紙への心のこもったメッセージ、本当にありがとうございます。心より感謝申し上げます

（東日本大震災復興支援委員会一同）

【ご意見・ご感想をお寄せください】

本紙では被災した各地の仲間へのメッセージ及び被災地からの情報発信など、相互交流ができる紙面づくりを目指しております。全国どなたからのメッセージでも構いません。本紙へのご意見・ご感想も大歓迎です。それぞれの立場からの声をお聞かせください。お寄せいただいたメッセージは、本紙面や本協会WEBサイトにてご紹介させていただきます（原則として投稿者氏名以外の個人情報掲載いたしません）。投稿方法はFAXもしくはE-mail: office@japsw.or.jpにてお願いいたします。

★題名に「PSWにゆうすについて」とご記入ください。

第47号 2020年7月15日発行

編集：東日本大震災復興支援委員会

発行：公益社団法人 日本精神保健福祉士協会

〒160-0015 東京都新宿区大京町23-3 四谷オーキッドビル7F

TEL. 03-5366-3152

FAX. 03-5366-2993

★URL <http://www.japsw.or.jp/>

★東日本大震災復興支援サイト <http://www.japsw.or.jp/ugoki/f-jyoho.html>

